

藤原亮司写真展 「もう存在しない ガザの日常」

0

2024年12月6日(金)

～

2024年12月22日(日)

藤原亮司写真展

「もう存在しないガザの日常」

2023年10月7日--。ガザを出たパレスチナ武装勢力によるイスラエル攻撃によって、イスラエル軍の侵攻が始まった。空爆、砲撃、地上部隊による攻撃。その報復は、戦闘員と市民の区別なく行われ、甚大な犠牲を今も生み続けている。

武装勢力によるイスラエル攻撃がおきてすぐ、わたしはガザの友人、サミール・スベータに電話をかけた。「イスラエル軍の侵攻は毎度のことだが、今回やつらは絶対に容赦はしないだろう」と、電話口で彼は言った。「これから、地獄が始まる」と。

そしていま、ガザは彼の予言どおりになっている。

衛星写真による解析では、今年9月末の時点でガザの建物の70パーセント以上が破壊されたという。イスラエル軍によって建物があつた場所や道路は掘り返され、土がむき出した更地になった。すべての大学は破壊され、避難民が暮らす小中高の学校も、砲撃や爆破の対象となっている。病院や、テントが乱立する避難民キャンプも攻撃の対象になり、安全な場所はどこにもない。

その「どこにもない安全な場所」を求めて、人々はガザの中をさまよっている。自分や家族に訪れるかもしれない、「死の順番」を待ちながら。

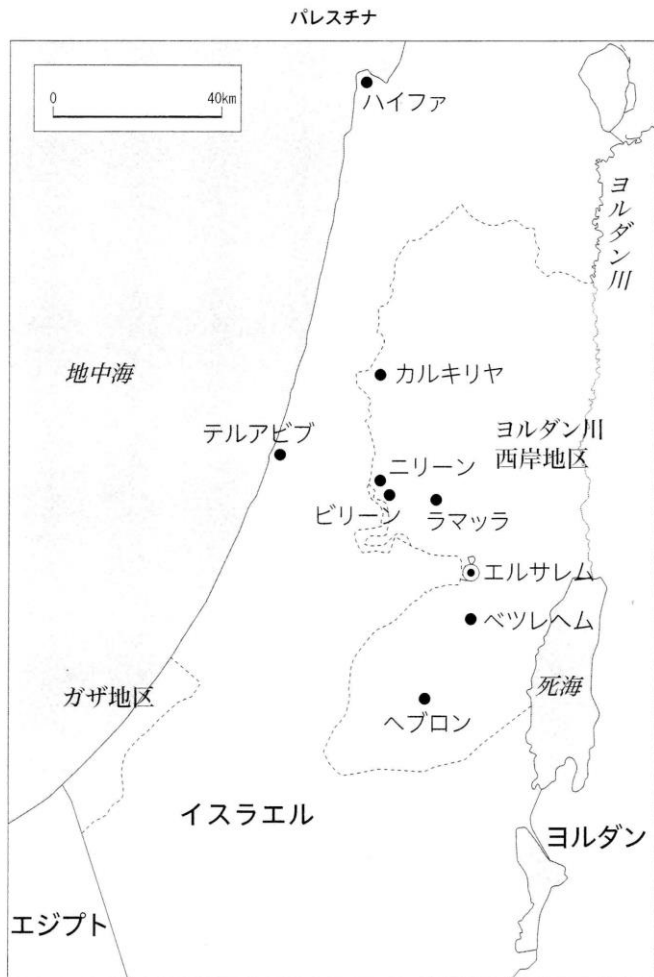
わたしが何度も訪れ、かつて見慣れたはずのガザの風景はもう、どこにもない。

封鎖され、ガザを出る自由もない人々の暮らし。これまでも何度となく行われてきたイスラエル軍による空爆や侵攻、自由の制限。そんな暮らしの中で、子どもは大人になり、青年は中年になり、中年は老人になった。

繰り返される殺戮と、人間の尊厳の破壊。自らの未来を、自身で選択することも許されない。

それでも、そこには人々の日常があつた。そしてこの侵攻のさなかでも、それは極めて不自由な形ではあるが、確かに続いている。

藤原亮司(ジャパンプレス)



パレスチナとガザ

- 藤原亮司『ガザの空のした それでも明日は来るし人は生きる』
(dZERO)



サミール・スベーター一家とその甥や姪。今回の侵攻でこの一家は家を失った。ガザ地区シュジャイヤ

Samir Subeta and his family, including his niece and nephew. The family lost their home in the recent invasion. Shujaiya, Gaza Strip

Meridian

第73号 2024年12月発行
発行・編集 神戸学院大学有瀬キャンパス図書館
〒651-2180 神戸市西区伊川谷有瀬518